



希望

ペンネーム (門司の花子)

主人が九州労災病院門司メディカルセンターに入院したのは、まだ寒い3月上旬の事でした。腎不全と云う名の病でした。

その1年前の元旦、主人はトイレで大出血し、それからが頻尿の始まりでした。段々ひどくなり、行きつけの病院で「一度、総合病院で検査をしてもらいなさい」との医師の言葉にも耳をかさず、検査をすすめる私の言葉には「もう云わんといてくれ」と。私は何も言えず、主人のしたいようにさせていました。

ところが秋頃から、段々食欲はなくなる、体力は落ちてくるで、自分の体力にも限界を見た結果の事でした。入院した次の日には手術でした。結果は、前立腺ガンと膀胱ガンが広がり、膀胱も取ると云う結末をむかえました。家族一同茫然としましたが、幸い体内に無数に広がるリンパ球には全く転移しておらず、これだけが家族みんなのせめてもの救いでした。

3月のまだ寒く冷たい日々、私の病院通いが始まりました。大手術をしたわりには、主人の容態は安定して居り、最初から食欲もあり体調もよかった。退院が伸びるにつれ、医師や看護師への感謝の気持ちが感じられるようになり、今は成って来た事を素直に受け止め、いつも笑顔の医師に夫婦共々、感謝の日々を送らせて頂いて居ります。それと共に、家族のありがたさがよく分かりました。

「Tさんの場合は、病院へ来るのがあまりにも遅かったので、何もかもが

大変」と医師が本当に残念そうに何度も云われました。主人もそれを聞く度にだんだん考えも変り、何かあったらすぐ病院へと云う気持ちに変わっていききました。それと共に、我が道を行く主人でしたが、入院している間に人の話に耳を傾けるようになり、だんだんやさしさが見られ、そこには、78歳の老人の姿がありました。これも病のおかげと思っています。それと共に、人を救ける医師の仕事は何と尊い事かと、あらためて思いました。

今日も病院へ向う西の空の胸を打つような、まっ赤な夕日に幸せを感じました。主人が退院したのは、7月下旬のすがすがしい朝でした。

